# 女仙

芥川龍之介

昔、支那（シナ）の或（ある）田舎に書生（しょせい）が一人住んでいました。何しろ支那のことですから、桃の花の咲いた窓の下に本ばかり読んでいたのでしょう。すると、この書生の家（うち）の隣に年の若い女が一人、――それも美しい女が一人、誰（たれ）も使わずに住んでいました。書生はこの若い女を不思議に思っていたのはもちろんです。実際また彼女の身の上をはじめ、彼女が何をして暮らしているかは誰一人知るものもなかったのですから。

　或風のない春の日の暮、書生はふと外へ出て見ると、何かこの若い女の罵（ののし）っている声が聞えました。それはまたどこかの庭鳥（にわとり）がのんびりと鬨（とき）を作っている中（なか）に、

如何(いか)にも物ものしく聞えるのです。書生はどうしたのかと思いながら、彼女の家(いえ)の前へ行って見ました。すると眉(まゆ)を吊(つ)り上げた彼女は、年をとった木樵(きこ)りの爺(じい)さんを引き据え、ぽかぽか白髪頭(しらがあたま)を擲(なぐ)っているのです。しかも木樵りの爺さんは顔中(かおじゅう)に涙を流したまま、平(ひら)あやまりにあやまっているではありませんか！

「これは一体どうしたのです？　何もこういう年よりを、擲らないでも善(い)いじゃありませんか！――」

書生は彼女の手を抑え、熱心にたしなめにかかりました。

「第一年上のものを擲るということは、修身の道にも

はずれている訣（わけ）です。」

「年上のものを？　この木樵りはわたしよりも年下です。」

「冗談を言ってはいけません。」

「いえ、冗談ではありません。わたしはこの木樵りの母親ですから。」

書生は呆気（あっけ）にとられたなり、思わず彼女の顔を見つめました。やっと木樵りを突き離した彼女は美しい、――というよりも凛々（りり）しい顔に血の色を通わせ、目（ま）じろぎもせずにこう言うのです。

「わたしはこの倅（せがれ）のために、どの位苦労をしたかわ

かりません。けれども倅はわたしの言葉を聞かずに、我儘（わがまま）ばかりしていましたから、とうとう年をとってしまったのです。」

「では、……この木樵りはもう七十位でしょう。そのまた木樵りの母親だというあなたは、一体いくつになっているのです？」

「わたしですか？　わたしは三千六百歳です。」

　書生はこういう言葉と一しょに、この美しい隣の女が仙人だったことに気づきました。しかしもうその時には、何か神々しい彼女の姿は忽（たちま）ちどこかへ消えてしまいました。うらうらと春の日の照り渡った中に木

樵りの爺さんを残したまま。……

——昭和二年二月——

底本：「蜘蛛の糸・杜子春・トロッコ　他十七篇」岩波文庫、岩波書店
１９９０（平成２）年８月16日第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：もりみつじゅんじ
１９９９年５月15日公開
２００４年１月13日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。